# そっちやない、こっちや「コミュニティ・ケアへの道」

企画＝伊藤方文
制作＝記録映画「コミュニティ・ケアへの道」製作委員会
構成監督＝柳澤寿男/撮影＝塩瀬申幸
題字＝沙羅千晴/スチール＝小林茂
録音＝小林賢/解説＝伊藤惣一
タイトル＝菁映社/作詞＝森氷都子
作曲＝冬木透
演奏＝くにたちカンマーコール合唱団
指揮＝岡本仁
協力＝知多市手をつなぐ親の会
記録映画製作委員会知多地域推進協力会
社会福祉法人　あさみどりの会
1982年/16ミリ
カラー/113分

愛知県知多市の療育グループの記録。障害者にとってのコミュニティ・ケア＝地域福祉とは何かを考える。

1981年(昭和56年)

働く障害者の連帯感
説得力持って画面に

「そっちやない・こっちや」

コミュニティーケアの記録映画完成

家庭

■撮りながら考え、考えながら撮る。これが原則の第一。事前にイメージがあり、シナリオを作り、それを映像にうつしかえる。

映画監督が撮りながら考え、考えながら撮るのは、ごくあたり前のこと。

それでも、あらためて、これが原則の第一と思い通したのは、この映画の主題、コミュニティ・ケア、或いは地域福祉のコミュニティ、地域とは何か、それを形づくるものは、いったいなんなんだろう、まるで見当もつかなかったからだ。シナリオを書ける道理がない。

とにかくフィルムをまわす。現在あるものを考えながら、くりかえし、くりかえしみる作業を、つみ重ねていけば、コミュニティ、地域、がすこしでもみえてくるのではないか。みえてくれば、対策も考えられる。条件設定も出来る。とはいえ、こうすればこうなるときまった方式がある訳ではない。

これこそ決め手と条件づくりをしても、期待通りの結果が出ない。思案にあまって、場あたりの思いつきに予想外の反応がある。

勿論反対の場合もある。

文字通り試行錯誤の連続で、先行がみえたり、見失ったりした。それでも、どうにか、ドキュメンタリー・フィルム「そっちやない、こっちや」が出来た。

それは私たちが第二の原則を忘れなかったからだろう。

私たちは、今まで、何度となく、障害を受けている人たちについて考え、行動する場合、かならず、当人の意見を聞けと教えられてきた。

私たちは、本当に、そうしてきただろうか。例えば「ちえおくれに何がわかる、何が出来る」ときめてかかって、私たちの論理、思惑、感情で事をすすめてきたのではなかったか。

まじめに、本人の意志、立場、都合を考えたことがあったか。映画スタッフも、指導員も、ボランティアも「まづ、その人に聞け」の原則をかたくなまでに守った。その時はじめて〝コミュニティ〟が次第にあきらかになった。

映画の題名を〝そっちやない、こっちや〟とした。

これは、知多療育メンバー、指導員、ボランティア、映画スタッフの共同作業による〝コミュニティ論〟でもある。これからどうするか。どうなるか。それは、この映画づくりに力をあわせた人たち、この映画をみてくれる人たちが、どれだけ一人の市民として〝自分のことは自分できめ、自分たちのことは自分たちできめる自由〟を守っていけるかにかかっている。

柳澤寿男

## ■「共に生きるために」より　評論家・水原孝

ずいぶん待たされた。しかし待ったかいがあった。柳沢監督が、二年の歳月をかけて完成した「そっちやない　こっちや」は、近ごろまれにみる優れたヒューマン・ドキュメントとなっているからである。

いまという時は、不気味な時代である。世の中が〝共死〟にむかって滑り出している時、誰もがそれを知っていて、あやしまなくなってきたからだ。

そんな時に、この映画はひとりひとりの人生がかけがえのない尊いものであり、共に生きるということが、なにもまして大切なことだと教えてくれる。心洗われる映画である。

しかも絵空事の作りものではない。知多市のトキくんたち――知恵遅れの成人たちを主体に、家族やボランティア、自治体、それに監督やスタッフまでもが力を合せ、共同作業所―ポパイのいえをつくり上げて行く実践の記録だからである。事実の重みが「黙って見ているだけでいいのか」と、ぼくたちに静かに迫ってくる。

柳沢監督は「ぼくの中の夜と朝」で、ぼくたちに「生きるってことは何か」と問いかけ、前作「甘えることは許されない」で、人権を無視した福祉を告発した。

それがこんどの「そっちやない　こっちや」では、ひとりはひりの人生を大切にし、町の中でともに生きる、ということはどういうことなのかと、知多の実践の中からあたたかい心で、ぼくたちに呼びかけている。